父に当るのである。

阿蘇文書の三田井氏が上と憑む「惟秀・惟治」は佐伯氏と考えられているが、かねてこの記録文は、阿蘇三田井及び佐伯氏の関係を示す貴重なものである。菊池義武や佐伯惟治が、反大友の旗幟を掲げ通し、勢威を増してきた大友氏に遂に滅ぼされたが、菊池義武と佐伯惟治との史実を調べる場合、この阿蘇家文書や、田尻家文書は暗示に富むように思える。

それにしても、佐伯氏が早くから高千穂に活躍し、三田井氏と結び、また後に田原氏と共に目来に挙兵する等、東奔西走したが、広範なその行動半径に驚くばかりである。阿蘇文書の惟治、田尻文書の大神惟治、また我等の柵年礼城主佐伯惟治の映像は、どうも重なるようである。佐伯惟治の自刃時の年齢は、初老の人ではあるまいか。

（おわり）

覚書

一台殿・台殿・台が娘——

本会顧問　矢田　清

堀田備前守城中に於て、一日大学頭林道春に問ふて曰く、

「近時童児らの唄に、『一台殿　台殿　台が娘　椹原源八　そこ退け　太郎左衛門よ』といふものあり。この意如何。」

道春答へて曰く、

「こは鎌倉幕府の権勢順を唄ひしもの也。尼将軍政子を権勢の第一とするが故に、一台殿　台殿と二つ童ね、次は比企義員に嫁せし台殿が娘、三は椹原源八、四は昔武士にして後盲人となりし安明寺太郎左衛門が、お伽衆として頼朝に伺候のため参上する時、『そこのけ　そこのけ　太郎左衛門よ』と聞けしき唄と。

（明治中期の古新聞より、この切抜き保持す）

編集子曰う——

○非年のいつ頃であったか、賛助会員の山内氏から、「一台殿　台殿——」のいわれについて質問を受けたことがある。勿論この私がわかろうはずはなく、この唄そのものもうろ覚え、いや殆んど忘れてしまっている。どなたか。

「いちく　たちく　たいのまいの——」

ではじまるこの遊び唄を、しまいまでまとめあげ、書いて教えて下さらんだろうか。

ほろびゆくこの遊び唄を「佐伯史談」に載せ、保存したいものである。

○なお、参考までに。この遊びというのは、冬分火鉢をとり囲んだ幼童たちが、火鉢の縁に撥り拳を並べ、唄いながら一つずつ除けていく、そして最後に残ったのをよしとする遊びで、古い継子立ての遊びに似ている。たあいのない遊びで、今もあるかどうか。

○ついでに私のふる里（本巻村字津々）に伝承の、きわめて短い遊び唄を紹介しよう。それはこうである

「いいちく　ちゃあちく　ちゃあちん　ばあこ　のうりん
そうりん　ごずきの　まんざい　ちりまこ　ちんとん
ひこ　しゃん　せ」

（おわり）